

花の種を まもった人びと



早春になると千葉県南部の南房総^{みなみぼうそう}では、スイセン、ナノハナ、キンセンカ、ヒャクニチソウ、キンギョソウ、ストックなど、色あざやかな花畑が広がります。けれども戦争のときには、花禁止令が出され、花の苗^{なえ}を引きぬき種^{たね}や球根^{きゅうこん}をすてるよう命じられました。美しい花畑にも、戦争の悲しみを乗り越えてきた歴史があるのです。

海辺のくらしと花づくり

太平洋に面した和田町^{わだ}（南房総市^{みなみぼうそう}）は、海からすぐに山がせまり、たいらな耕作地^{こうさくち}が少ないため、かつては漁業と林業を中心にくらしていました。男の人は漁^{りょう}に出て、女の人はわずかな畑で仕事をしながら、重いかごをかついで魚の荷揚げ^{にあげ}を手伝う日々でした。冬の寒い加工場では足や腰が冷え、指先もかじかんで包丁^{ほうちよう}がうまくにぎれません。子どもたちも小さな妹や弟の子守^{こもり}をしながら、浜でワカメやテングサをひろう手伝いをし、家族みんなで働いていました。

苦学して薬剤師^{やくざいし}になり、朝鮮で薬草^{ちようせん}の研究をしてきた和田町の間宮七郎平^{まみやしちろうへい}さんはケシ栽培^{さいばい}に



取り組んでいました。そのころすでに房総^{ぼうそう}の各地では花づくりの研究が進められており、七郎平さんも花をつくってみることにしました。これまで綿花^{めんか}や麦しかつくれなかった和田町のだんだん畑は、海に面して日あたりがいいので、花づくりに適^{てき}していて他の土地よりも早く出荷^{しゅつ}することができると思ったのです。

まわりの人たちは「食えない花を育ててもしょうがない」と笑^{わら}っていましたが、農婦の川名リンさんだけはいっしょに花づくりの研究をしました。

苦勞の末、1922年に花の出荷は成功し、カンギクが1匁^{びよう}3円、キンセンカに5円の値^ねがつかれました。男の木こり仕事で1日50銭、小学校の先生の初任給^{しよにんきゆう}が50円（いまは約20万円）という時代のことです。しだいに村人たちも花づくりをはじめようになり、寒い冬の日でもまるでじゅうたんをしいたように、美しい花が色とりどりにさきました。その年の暮れに鉄道が開通すると、海女^{あま}さんたちも花かごを背負^{せお}って東京まで売りに行くようになりました。

翌年^{よくねん}の関東大震災^{だいにんさい}で東京が焼け野原となり、一時は鉄道もとまってしまうましたが、まもなく震災慰霊祭^{しんさいいれいさい}のために花の注文が急増し、再び花づくりを志^{こころざ}す青年がふえました。そこで生花組合^{せいかな}を設立し、東京だけでなく全国に出荷先を広げていきました。

戦争と花禁止令

1931年からはじまった中国との戦争が長引き拡大すると、「ぜいたくは敵！」として国民は日用品も制限され、塩や醤油、味噌などの調味料も配給制になりました。お米が少なくなると、イモや大豆をつぶして食べるしかありませんでした。

1941年にはアジア太平洋戦争もはじまり、和田町でも男の人に徴兵の「赤紙」がとどき、戦地に行く人がふえてきました。漁師たちは、発動機をついた漁船が軍隊に取られ、魚をとることもできません。海にもぐれる海女さんたちは、アワビやサザエの代わりに、火薬の原料になるカジメやアラメなどの海藻を採取するように命じられました。となりの館山町（館山市）では、軍隊が使う目的で、子どもたちがウミホテルを採取させられていました。

農家は食糧増産のための作付割当を国から命じられ、1944年になると、とくに千葉県と長野県では花が禁止作物に指定されました。花畑は苗をぬきとってイモ畑や麦畑につくりかえ、花の種も球根もすべて焼却しなさいという命令です。

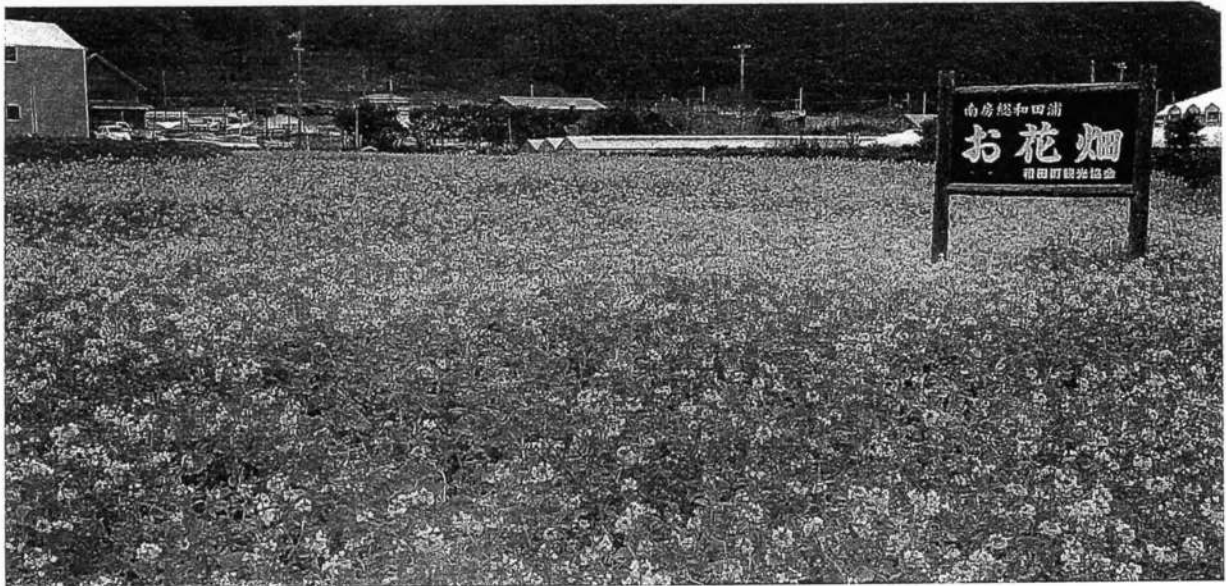
村の青年団が畑や納屋を見まわって監視し、花の種を持っている農民を処罰するようになりました。どんなに花づくりを望んでも、軍の命令に従わない者や戦争に反対する者は「非国民」と呼ばれて、冷たい目で見られるような社会になってしまったのです。

じゅうたんのように美しかっただんだん畑は、すっかり花がぬかれてしまいました。まるで浜に打ち上げられた海草のようにしおれて、なぎ倒されています。泣く泣く種や球根を海にすてた人もいました。七郎平さんも国の命令にはさからえず、心もちぎれる想いで、大切に育ててきた花々をぬきとったといいます。

そんななか、リンさんは、どうしても命令に従うことができません。掘り出したスイセンの球根をすてるふりをして、人目につかない山奥の杉林にこっそりとかくしました。それが精いっぱい抵抗だったのです。

サイパン島や硫黄島の日本軍が全滅しました。1945年4月には沖縄本島にアメリカ軍が上陸し、地上戦となりました。次はこの房総半島が「本土決戦」の場所になるといわれ、次つぎと陣地や特攻基地がつくられていきました。敵の上陸にそなえて、女の人も子どもたちも竹や





和田町に広がるナノハナ畑

りをもって戦う訓練をしました。花のなくなっただんだん畑には、敵の標的になるようなニセ陣地もつくられました。

再び花づくりを

その年の8月15日、長く苦しかった戦争がようやく終わりました。季節が移り冬になると、リンさんが球根をかくした山奥の杉林には、一面にスイセンの花が咲きました。そこは土が深く、ふかふかとしたふとんのようだったので、球根が根をおろし生きのびることができたのです。

リンさんのほかにも、食べものといつわって種をナベにかくしていた人もいました。残らず絶えたと思われた球根や種は、花を愛する人びとによってまもられ、再び花づくりがはじまりました。

リンさんの台帳には、「1947年1月25日、エリカ16束、小菊110本」という記録があります。戦後まもなく、まだ満足に食べられない人というのに、花は毎日のように東京で売っていました。

ある日、不思議に思った息子の武さんが市場の人にたずねてみると、
「それは、戦争で亡くなった人たちの慰霊に使われているのですよ」といわれました。

それから、武さんは「花づくりは平和産業だ」と考えるようになったそうです。この話は田宮寅彦の小説『花』、映画『花物語』、郷土の音楽物語『花とふるさと』となり、多くの人に知られるようになりました。

「花は口で食べることはできないけれど、口で食べるものだけが食べものではないの。心で食べるものがなくなってしまったら、心は生きてゆけなくなってしまうのよ」

いつもリンさんがいっていた言葉です。武さんは、花がつかれなくなるような戦争は二度とあってはならないというねがいをこめて、「花は心の食べ物です」と印刷したダンボール箱で、花を出荷するようになりました。いまも和田町をはじめ南房総には美しい花畑が広がり、多くの人の心をいやしています。(池田恵美子)

